

平成15年度特別企画展報告

## 函館山

—過去、現在、そして未来へ—



函館谷地頭地平均ノ景（明治14年）

（北海道大学附属図書館蔵）

平成15年6月3日から8月24日の73日間にわたり、市立函館博物館本館を会場に、特別企画展「函館山—過去、現在、そして未来へ—」が開催され、函館市民はじめ修学旅行生、観光客など3,569名におよぶ観覧者でにぎわいました。

函館市の都市公園であり、約60%の緑地を占める緑豊かな函館山は、市街を見下ろす展望台として、気軽なハイキングの場として、さらに、自然函館観察の場として、多くの市民や観光客などに親しまれています。

近年の自然環境に対する意識の高まりは、函館山を観光のためだけに活用する対象から、自然観察の生きた教材として活用する対象へと変化しつつあります。このような変化は、その時々時代の要求により変わってきます。函館山は昔から緑豊かな（自然の宝庫）だったわけではなく、実は200年ほど前までは（はげ山）だったのです。さらに、今でこそ函館山は市民の憩いの場として活用されていますが、市民に開放され、普通にハイキングや自然観察を楽しめるようになったのは、昭和20年以後のことです。

今回の展覧会では、（はげ山）であった函館山が今から200年ほど前の植林、さらに、明治維新以降のスギ・マツなどの植林を経て、いかにして今日のように自然豊かな山の姿に変わってきたか。など、時代ごとのできごとを絡めながら、絵図や写真などで紹介し、さらに、現在、この山や周辺海域に生息する生き物の標本などを分布状況も含め展示し、紹介しました。

この展覧会が、函館市のシンボルとしての函館山を見直し、将来について考える機会を、見学に来た方々に提供できたのではないかと考えています。

佐藤 理夫



倉山卯之助が200年前に植えたスギ



エゾアカガエル

# 平成15年度特別展報告 **箱館海戦記** —海と陸 箱館戦争と軍艦—

平成15年度の特別展「箱館海戦記—海と陸 箱館戦争と軍艦—」は五稜郭分館を会場に、平成15年7月26日(土)から9月30日(日)の57日間開催され、23,784人の方に来場・観覧いただきました。

今回の特別展で取り上げた蒸気軍艦による「海戦」は箱館戦争での最も大きな特徴です。嘉永6年の米国艦隊の外圧により開国をよぎなくされた日本は、独立国としての体面を保つために軍隊の洋式化と軍備を急ぎます。しかし決定的に足りなかったのはそれまでの日本には無かった「戦」「国家」「ルール」などの「近代という概念」でした。小銃や砲など物の登場もさることながら、日本人は蒸気軍艦により自らが近代を体感することになりました。

箱館戦争は、事の起こりから終結まで、様々な場面で軍艦が

登場します。品川沖の脱走、宮古湾の海戦、明治新政府軍による箱館総攻撃や日本初の艦隊決戦となった箱館港の海戦は、これまでの戦の概念を変えました。黒田清隆の発案といわれる海陸両面作戦は、乙部の上陸作戦、松前城の奪還、矢不來の攻防、そして箱館総攻撃の際にも旧幕府脱走軍を圧倒します。開港以来、近代を目指す独立国としてのシンボルであった五稜郭は艦砲射撃を受け戦わずして降伏します。

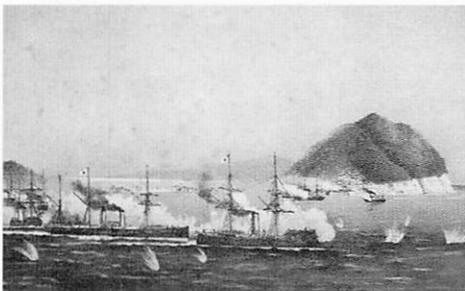
近代戦の戦火に巻き込まれた蝦夷地・箱館は武士の時代の最後の砦となり、同時に明治維新の幕をあける象徴となりました。

武士の時代から市民の時代へと転換する節目となった箱館戦争は名実ともにこの国の進むべき道を決した戦いだったといえるのです。

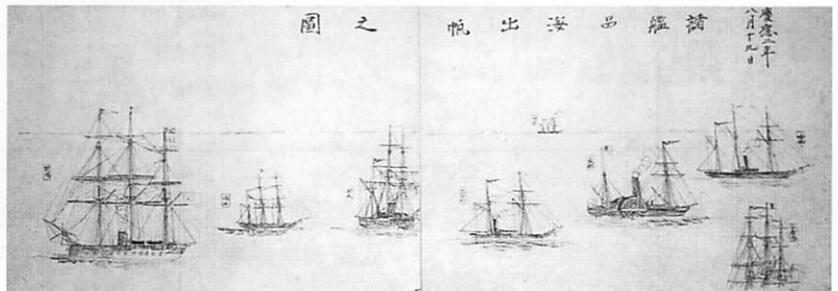
佐藤 智雄



箱館海戦記展示解説セミナーの様子



日本帝国軍艦帳 (大道寺小三郎氏蔵)



箱館戦争図絵—諸艦品海出帆之図— (市立函館図書館蔵)



## 平成16年度展覧会 先取りチェック!!



### 平成16年度特別企画展 **ペリー—箱館来航150年**

嘉永6(1853)年6月3日、ペリー提督率いる4艘の軍艦が浦賀沖に現れ、日本に開国を求めました。翌安政元年3月3日、横浜において日米和親条約が締結され、下田と箱館の開港が決定しました。

開港場に指定された箱館は、当時松前藩領で、松前・江差とともに松前藩の主要港のひとつでした。日米和親条約を締結したペリーは、5艘の軍艦を率いて安政元年4月15日箱館に入港しました。箱館に外国船が入港するのは、文化10(1813)年のロシア軍艦ディアナ号以来40年ぶり、松前藩をはじめ箱館市中も大騒ぎとなりました。

日本のその後を大きく変えたペリー来航から150年、当館では「ペリー—箱館来航150年」と題し特別企画展を開催します。ペリーの国内での動きを中心に紹介しますので、この機会にご覧いただければ幸いです。

保科 智治

### 平成16年度特別展 **士道—新撰組と箱館戦争—**

特別展「士道—新撰組と箱館戦争—」は、7月24日(土)から9月26日(日)まで五稜郭分館で開催します。

ここ数年来、ネットやコミックなどで静かなブームだった「新撰組」が今年1月からNHKの大河ドラマで放映が始まりました。成立してから解散するまで約5年。活動の中心からか、「日野」「京都」とイメージされがちではありますが、函館は、新撰組にとって終焉の地。マニアにとっては館蔵の「中島登—戦友姿絵—」の前で手を合わせ、土方歳三最後の地碑のため息の一つ。函館は今や巡礼の地なのであります。何はともあれ新撰組は開国から明治維新という大変革期の中で誕生し未曾有の内乱の中「誠忠」を旗印に「士道」を貫き、ここ函館でも最後まで戦い続けました。今回の特別展では箱館戦争を主なテーマとし、新撰組の結成から終焉までを、関連資料で展示・紹介いたします。

佐藤 智雄

平成15年度新収蔵資料展から資料紹介

# 樽 製作 道具

昨年度、市内入舟町で塩辛を詰める樽を主に製作していた方の道具58点が寄贈されました。

樽を製作していた故進通米蔵氏は明治43年に千葉県野田市で生まれ、醤油の樽職人として働いていました。昭和18年頃、函館の水産加工会社が塩辛用樽を製作する職人を本州方面で募集した際に来函しました。

戦後まもなく勤めていた水産加工会社が閉鎖しましたが、周辺に塩辛加工場が多数あったため、それらの加工場の仕事を請け負うこととなりました。

水産加工会社に勤務していた時は、材料となる杉は秋田方面で、竹は佐渡から仕入れていたようです。独立してからは、杉は営林局などから仕入れ、柾目に割って乾かして保管します。タガの竹は市内の商店から購入しました。竹は一寸巾位に割ってあるものを20本位に丸く束ねてある状態のものを購入していましたが、後には竹一本そのままを購入しました。道具類も市内の商店から購入していました。

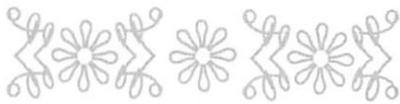
樽の製作工程は、丸太を小巾板にする。その際に丸ナタで丸みを付ける。型木で形を整えて小巾板を乾燥させる。センと型木で小巾板を整える。のりを付けて仮止めし、鉄あるいは竹の仮輪を付ける。一斗樽で一週間乾かす。輪をはずしてカンナで中を削る。外もカンナで削る。センで粗削りし、カンナで仕上げる。底板と蓋および蓋の栓を作る。フタを閉めて業者に渡す。

実際に製作された樽が残っていなかったことが残念です。



故進通米蔵氏の作業風景

保科 智治



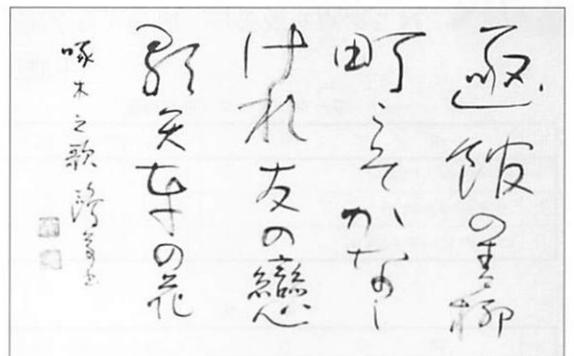
## 平成15年度美術常設展から 金子鷗亭作品展



「函館の青柳町こそかなしけれ…」は、石川啄木が函館時代を回顧して詠んだ歌であり、函館市民にとって、また青柳町に立つ当館にとっても、馴染み深い歌のひとつです。

写真は書家金子鷗亭の作品です。鷗亭は明治39年、松前で生まれました。札幌鉄道教習所で大塚鶴洞に書を学び、函館師範学校では独学で書に励み、在学中から個展を開いています。卒業後は札幌で教職に就きますが、比田井天来との出会いを機に上京を決意し、書家としての道を歩み始め、「新調和体」など現代の書に関する論説を次々と発表します。昭和23年に全日本書道展（第一回毎日書道展）の設立に参加、後には創玄書道会、近代詩文書作家協会を創立します。また昭和27年から「全国戦没者追悼之標」を揮毫していることもよく知られます。近代日本文学を題材に、広く親しまれる書を目指す近代詩文書運動を推進した功績は高く評価され、昭和62年に文化功労者、平成2年には文化勲章を授与されます。郷里北海道に対する芸術振興も認められ、平成元年には北海道開発功労賞を受賞しています。

平成13年、鷗亭は95歳で世を去りました。翌14年にご遺族から、作品および陶磁器・書画コレクションが函館市に寄贈され、中から今回は石川啄木歌のシリーズを中心に作品を紹介しています。一般によく知られる詩歌を、金子鷗亭の手による書の調和とリズムで味わっていただければ幸いです。

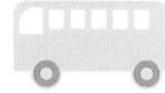


函館の青柳町こそかなしけれ  
友の恋歌 矢車の花  
石川啄木歌  
金子鷗亭書（平成5年啄木展出品）

霜村 紀子

はなまる

平成15年度博物館講座報告 バスツアー！



道南とっておき資料館ツアー

6月22日(日)、快晴のもと参加者50名を乗せた満席のバスは、最初の訪問先「七飯町歴史館」へ向かいました。常設展、企画展見学後、収蔵庫を見学し、博物館の舞台裏を垣間見た驚きと出会いがありました。「砂原町郷土館」では、駒ヶ岳の噴火をメインテーマとして漁業の町を象徴する漁家の復元家屋に目を見張り、忘れかけた懐かしい時代にタイムスリップ！「森町公民館郷土資料館」では、町の歴史、文化の貴重な資料に触れ、発掘整理事務所では、遺跡出土の土器、石器等がやがて博物館の中で上手に活用されていく一コマを体感しました。「上磯町総合文化センター」では、郷土資料館が文化ホール等の施設と有機的に結びつき、収蔵庫の生活用具が文化ホールでの出番を待っているかのようなのでした。今回のいつでも行けそうで行けそうもない資料館と50人の出会いは、「もう一度ゆっくり来てみたいなあ」と誰かがぼつりと最後に漏らした「とっておきの旅」となりました。



収蔵庫を観る(七飯町歴史館)

長谷部 一弘

親子で行く自然発掘の旅

今年度は、単講座の初企画として、今金町の教育委員会の全面的な協力の下、合同で『親子で行く自然発掘の旅』を実施しました。今まで厚沢部町で実施してきた『親子で行く自然体験キャンプ』に代えて実施したものです。当館からは親子22名と職員2名が参加しました。今金町側からは7名が参加しました。

まず、(旧中里小学校)に集まり、町内で発掘されたピリカカイギュウの骨格標本の説明を受け、その後、貝化石が露出している(後志利別川河川敷)に移動し、貝化石を採集しました。中にはメノウを見つけた参加者もいました。昼食後、(ピリカカイギュウ化石の発見場所)と、平成15年6月7日にオープンした(ピリカ旧石器文化館)を見学して帰路につきました。

講座自体は好評でしたが、開催が平日であったため、親子が参加しづらいとの問題点がありました。来年度はこの点を改善し、実施する予定でいます。



河川敷での貝化石発掘風景

佐藤 理夫

平成15年度博物館講座開催表

ワークショップ(通年講座)

Table with 4 columns: No., 講座名, 開催期間, 参加者数. Rows 1-3.

単講座

Table with 4 columns: No., 講座名, 開催期間, 参加者数. Rows 1-10.

単講座

Table with 4 columns: No., 講座名, 開催期間, 参加者数. Rows 11-26.

## 沿海地方国立アルセニエフ博物館との姉妹提携 2 ウラジオストクだより

姉妹提携の調印から1年、6月28日、我々は広大なロシアの大地、ウラジオストクに到着。ホテルに入り、レストランで夕食。初のロシア料理、メニューが分からないが食べることができた。午後9時でも、昼と同じ位明るい。部屋で今後の日程を確認。不安いっぱいのまま就寝。

翌日、館長を表敬訪問、再会。何か込み上げるものが。なぜだろうか。早速展示の準備に取りかかる。職員と共に、交流を深める一歩。地元ラジオ局が今回の展示会の意義などについて取材、暫したじろぐ。この日ドルをルーブルに両替えし、身も心も金もロシア人擬きに。

3日目、博物館でピエンナーレ関係者の記者会見、私に質問あり、多少たじろぐも何とかクリア。この夜ゴーリキー劇場で盛大にピエンナーレ開会式、我々も「函館から参加」と紹介され、大拍手で迎えられ、ささやかに手を振り応える。式典終了、午後11時ホテルへ。

4日目、博物館で「函館-ウラジオストク・歴史展」開会セレモニー。満員の列席者の前で、市長ほか挨拶、その1人に私も。これは最大級のたじろぎ!! 無事終了したが、何か物足りなさ。

5日目、市長へ表敬訪問、姉妹都市として、固い契りを確認して握手。夜は市制施行記念式典へ、盛大。

7月4日に丸尾総領事を表敬訪問し、協力の暖かい約束の言葉に感激。また滞在中は各種芸術など鑑賞や他の博物館など訪問の連続。特にアルセニエフ博物館やアルセニエフの家の博物館は取り分け素晴らしい。

5日はピエンナーレの閉会式。ウォッカ、ワイン、民族舞踊とロシア文化を満喫。まだまだ巡見は続く。そして交流の大切さを学ぶ。8日はサプリキン実行委員長や館長をはじめ、送別の宴を開いて頂いた。暖かい雰囲気、国際交流の重要性を改めて体験。書き尽くせない。

留守の皆様 スパシーヴァ!!

佐野 幸治



ウラジオストク市長、ピエンナーレ開催を宣言する



アルセニエフ博物館職員と展示準備をする



ウラジオストク市民、観覧する



アルセニエフの家博物館を観る

2003年7月1日から6日間の日程で、市立函館博物館、沿海地方国立アルセニエフ博物館姉妹提携一周年を記念し、第三回ウラジオストク・ビジュアル芸術ピエンナーレ博物館プログラムノミネートの博物館交流事業展覧会「函館とウラジオストク-歴史的関係と協力の経験-」が、ウラジオストク市沿海地方国立アルセニエフ博物館において、盛大に開催されました。

このたびの展覧会は、両博物館の共同企画、展示により函館とロシアおよびウラジオストクとの歴史的関わりと出会いに焦点をあて、ゆかりのある古写真や絵はがき、書籍、写真パネル等を展示、紹介しました。

「函館、ロシアの架け橋、その人々」、「函館、ウラジオストクとの出会い」、「目で見る今日の函館」の展示内容は、改めて両博物館における歴史的関係の確認と将来展望を示唆するものとなりましたが、ウラジオストク市民にとっては、古き良き時代への郷愁とはじめての函館との出会いを経験することになりました。

会期中に開催された在沿海地方博物館一堂に会した「円卓会議」では、文化の相互理解発展に向けた博物館やギャラリーの役割博物館と地域の関わりについて活発な討議がなされ、特別ゲストとして日本における博物館と地域の関わりを紹介するなど有意義な情報交換を行いました。

また滞在期間中、ウラジオストク市をあげての芸術、文化の祭典ピエンナーレの中で、沿海地方、日本等近隣諸国を取り込んだプログラムに参加することができ、博物館そのものが地域と住民にとってあたりまえに向き合っていることを十分認識することができました。

今回の交流事業が、ウラジオストク市、外務省はじめ多くの関係機関、関係者の理解と協力によって成功裡に終了し、今後の函館、ウラジオストク間の更なる活発な市民交流の継続を確信させるものとなりました。

長谷部 一弘

### 入館者数報告

過去5年間の博物館本館・五稜郭分館・郷土資料館3館の入館者数と今年度の月別入館者数をまとめました。なお、平成11年度、郷土資料館は改修のため休館していました。

平成10～14年度の入館者数

	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度
博物館本館	12,018	8,190	7,283	8,617	9,643
五稜郭分館	97,702	95,291	70,178	81,464	82,154
郷土資料館	9,752	—	2,242	9,260	9,679

平成15年度の入館者数

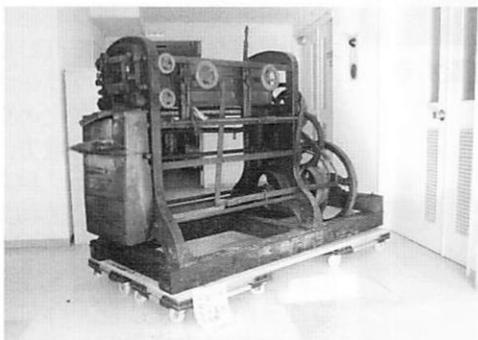
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
博物館本館	495	1,802	1,252	1,008	1,309	445	907	185	193	115	194
五稜郭分館	5,143	15,417	11,432	4,606	12,431	9,230	5,601	5,505	3,726	2,036	3,282
郷土資料館	444	2,196	1,682	816	1,322	1,917	744	444	339	188	258

### 平成15年度新収蔵資料紹介

ここに掲載している新収蔵資料は、平成15年4月1日から平成16年1月31日までに受け入れたものです。

#### ○寄贈資料

- ・ THE ILLUSTRATED LONDON NEWS 他 16件404点  
[東京都・大給 海真氏寄贈]
- ・ 写真 1件2点  
[埼玉県・権並 法子氏寄贈]
- ・ 写真(複製) 1件1点  
[函館市・川又 静氏寄贈]
- ・ スイートピー花(岩船修三画・色紙) 1件1点  
[函館市・四辻 京子氏寄贈]
- ・ ストーブ 1件1点  
[函館市・村瀬 治二氏寄贈]
- ・ 切鯛(するめ)製造機械 他 35件40点  
[札幌市・女川 義昭氏寄贈]
- ・ オオセグロカモメ 他 6件6点  
[上磯町・佐藤 理夫氏寄贈]
- ・ アイヌ民族資料 5件6点  
[函館市・計良 芳枝氏寄贈]



切鯛製造機械

### 博物館機構・職員構成

#### ■市立函館博物館(本館)

〒040-0044 函館市青柳町17-1  
Tel. 0138-23-5480 Fax. 0138-23-0831  
<http://www.museum.hakodate.hokkaido.jp>  
[hakohaku@museum.hakodate.hokkaido.jp](mailto:hakohaku@museum.hakodate.hokkaido.jp)

- 館長 佐野 幸治
- 管理係長 中川 強
- 熊谷 紘司
- 市村 栄子
- 佐藤 恒一
- 学芸係長 長谷部一弘(考古・民族)
- 学芸員 佐藤 理夫(自然)
- 学芸員 保科 智治(歴史・民俗)
- 学芸員 霜村 紀子(美術)
- 山本 泰子

◇函館の歴史や自然、生活道具、函館周辺の考古資料、美術資料を展示

#### ■市立函館博物館五稜郭分館

〒040-0001 函館市五稜郭町44-2  
Tel. 0138-51-2548 Fax. 0138-51-2146

- 分館長 森岡 稔
- 紺谷 克孝
- 渡辺 敏子
- 学芸員 佐藤 智雄(歴史・民俗)

◇五稜郭、箱館戦争関係の問合せは分館まで

#### ■郷土資料館(旧金森洋物店)

〒040-0053 函館市末広町19-15  
Tel. & Fax. 0138-23-3095

◇金森洋物店、明治・大正期の生活道具を展示  
詳しい資料の問合せは本館まで

—誌名SARANIP(サラニップ)について—  
アイヌ語：シナの樹皮で編んだ袋。  
博物館情報や研究成果などをSARANIPに入れておき、その蓄積が今後重要な資料となっていくようにと命名したものです。



SARANIP—サラニップ—No.43 2004. 3. 31発行

編集・発行 市立函館博物館  
〒040-0044  
函館市青柳町17-1(函館公園内)  
Tel. 0138-23-5480 Fax. 0138-23-0831